

人を笑わせることの考察（一）

伊藤浩睦

私たちの年代の男性がなにか人を笑わせるようなことを言おうとすると、おやじギャグといってバカにされる傾向が今の世の中にはありますが、人を笑わせよう、人に笑わせてもらおうとする男性と、そのような感覚に乏しくて、自分の話で自分が笑うことしかしない女性の間で、笑いに対する性による違いがあるように感じています。

女性の笑いに対する感覚に関しては、多様な例がありますが、他人様の行為をあげつらうのは憚りがありますので、私の母親を例に挙げてみます。

笑いというものを蔑んでいるようなことがあって、私がテレビでお笑い番組などを見ていると、お笑いなんてバカがバカを言っているだけでいちばん詰まらない、などと言います。

昔のPTAなどはこのような感覚の人の集まりだったから、子ども向けのお笑い番組を目の仇にしたのだなあと、今になって思っています。

お笑いを蔑んでいるから生涯笑わないかということのようなことはありません。今までみんなが何十回と聞いている旅行に行った時の思い出話などを、誰も聞きたくないのにやり出します。こちらが聞き飽きている話をして行って、誰かが何かを間違えたというくだりにくると、自分で自分の話で笑い出して、ひとしきり笑ったら、あーあ、と言って、これでやっと長い長い話が終るという聞かされ手の期待を裏切って、聞き飽きた話がなおも続くといったパターンなのですが、自分の話では笑うのです。

聞かされ手は誰も笑いませんが、そのようなことはお構いなしです。自分の話で自分が笑うといった世界で自己完結しています。聞かされ手を笑わせてやろうといった気持はありません。笑いを蔑んでいますから、誰かに笑わせてもらおうといった気持もありません。

この場合に笑いは、他の人との間で成立するものではなくて、自分の中限定の笑いであり、自己愛の表現のようにも感じられます。

女の人の笑いには、この種のものが多いうように私には感じられます。寄席の客が

圧倒的に男性が多いのも、このあたりに理由があるのではないのでしょうか。

男性の場合には寄席に行って誰かに笑わせてもらいたい、おやじギャグと軽蔑されても、なにか面白いことを言って周囲の人を笑わせたいといった欲求を持っていることが多いようです。

俳句会の主宰もやっていますが、男の人は、滑稽な句を作っているわけではないのに、時折り読み手を笑わせようとする句を作ってくることがあります。女の人にはそのような感覚はなく、人に笑われないような句を作ることに懸命になっています。

滑稽俳句の投稿者のお名前を拝見すると、男女比は半々くらいですが、多くの句会が圧倒的に女性が多数になってきている現状を見れば、男性比率は高い方だといえるのではないかと思います。

古くは俳諧連歌と呼ばれて、滑稽な連歌であった俳句が、長らく男性の文芸であったことも納得が行くというものです。